別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　金　敬黙　（キム　ギョンムク）

金敬黙氏の学位請求論文『人道支援と平和構築プロセスにおける NGO ネットワークの研究：カンボジア紛争の分析を中心に』は、カンボジア紛争の歴史過程を緊急人道支援から紛争後の平和構築の時期に区分けし、この中で形成されてきたさまざまな NGO のネットワークの活動を実証的に分析した論文である。この論文では、NGO が実際に関与する動機や制約は何か、さまざまな促進要因、制約要因の中での NGO の対処方法とはどのようなものか、NGO ネットワークがもたらした影響（インパクト）はどのようなものか、という 3 つの問いを、これまでほとんど研究されてこなかった事例の検討を通じて、NGO のネットワークのダイナミズムを解明するとともに、その上で国際政治学での NGO 研究における一定の理論化と今後の研究展望を切り開くことを狙った研究である。

全 7 章から構成される本論文は、A4 用紙で脚注を含む本文約 200 ページと資料・参考文献約 20 ページからなっている。

以下、論文の構成にしたがって内容を紹介したい。序章では、問題の所在と研究の目的が述べられた後、人道支援と平和構築プロセスにおける NGO の活動が紹介されている。ここで、NGO の定義と歴史、そして人道支援と平和構築活動に関する NGO の諸形態の整理がおこなわれているほか、カンボジア紛争を事例研究として選んだ理由が説明される。

第 1 章では、分析の理論的な枠組みが提示されている。先行研究の批判を踏まえたうえで、新しい枠組みの必要性が提起され、その上で本稿の主な分析枠組みとなる NGO ネットワークの概念が定義され、これが動くメカニズムが説明される。

第 2 章以降は、先の 3 つの問いをそれぞれの事例において検証する形で NGO ネットワークの実証分析が行なわれる。第 2 章の事例は本論文で扱われるほかの事例と比べて、やや異質なものである。この事例だけが、国家や企業、労働組合などが参加するという形で定義されるアメリカ国内のマルチセクトラル・ネットワークであり、活動の現場もカンボジア国内ではなく、タイ・カンボジア国境地帯の難民キャンプを主たる対象とするという特徴を有している。

第 3 章では、緊急援助を行なった NGO ネットワークを事例とし、その性格と特徴の解明が行われている。本章では NGO の救援活動と、国家や国際機関の救援活動の競合関係が中心的に議論されている。

第 4 章では、国際社会の制裁措置によって、カンボジアが孤立していた時期（1982 年－1991 年）が扱われている。この時期は、NGO が復興支援活動において中心的な役割を果たしており、復興支援を行う上で NGO はネットワークを形成し、関係諸国に対して圧力を行使したり、専門的な活動を展開したりしていた時期でもあった。その意味では NGO と

NGO が属する本国政府は対立関係におかれていた時期でもあり、この関係がここでの焦点になっている。

第 5 章では、ODA を活用した国際協力にとりくむ日本政府に対して、日本の NGO がネットワークを活用しながら、どのように ODA への監視活動に取り組んだのかが検証されている。中でも、開発をめぐる議論において、政府が進めた経済発展型の規範と NGO が推進した環境保全型の規範の対立が見られるという形の規範をめぐるアクター間の葛藤に焦点が当てられている。

第 6 章では、紛争後の平和構築活動の重要な指標である、民主化支援に関する現地（ローカル）NGO の活動が検証されている。具体的な事例としてはカンボジアで勢力を拡大してきた選挙監視 NGO ネットワークが分析対象となっており、その活動と政府の干渉の関連が示されている。

終章では第 2 章から第 6 章で分析した NGO ネットワーク活動の比較分析と整理が行われる。ここで、個別の事例ではなかなか見えなかった NGO ネットワークのパターンや特徴が、以下の 6 点としてまとめられる。

①NGO がネットワークを結成することによって、人道支援と平和構築活動への参加がいっそう容易になる。

②NGO ネットワークには多様な類型があり、それらの形態は、政治的機会と制約に柔軟に対応するためにネットワーク構成員によって選ばれる。

③NGO ネットワークを構成するアクターの関係は非対称的であるため、NGO ネットワークにおいてリーダーシップを発揮する NGO の役割が重要になる。

④NGO ネットワークが他のネットワークと異なるのは、NGO ネットワークの規模的な膨張や NGO の組織拡大を通じて、権力や財力など利益の追求を主たる目的としない点である。

⑤代わりに、NGO の行動原理は道義的な価値や規範の伝播におかれ、その価値、規範の最大化のために、合理的な選択をも重視する。

⑥しかしながら、NGO ネットワークを通じた人道支援と平和構築活動には依然として限界が残さているだけでなく、良くも悪くも外部者としての関与が意図せぬ事態を招いてしまう場合も多い。

こうしたファインディングを踏まえて、人道支援と平和構築プロセスにおける NGO ネットワークの理論化と一般化が試みられ、価値・規範対合理・効率という単純な二項対立的な議論の展開がそれほど有効ではないこと、ネットワークを活用すると NGO の活動範囲は広がると同時に、その能力も高まるのであるが、今度は、NGO 自身がさまざまな弊害をもたらしてしまうというジレンマに陥ることが、結論として導出される。そのほか、本章では、本論文で十分扱えなかった重要な課題の整理が行われ、今後の研究の方向性が提示されている。

本論文の学界に対する貢献は、主に以下の 3 点に集約できる。第一に、とりわけ、従来

のトランスナショナルなNGO研究が、その成果がみえやすい一部の領域に特化してきたのとは一線を画し、先行研究が存在しない人道主義と平和構築活動に携わるNGOのネットワークをあえて事例として選び、その実証分析を試みた点であり、従来の研究では資料的な制約などのため行われることがほとんどなかった新しい学術的貢献になっている点である。

第二に、上記の作業を行うために、それほど十分な整備が行われてこなかったNGOの資料にアクセスし、これまで用いられることがなかった資料を丹念に用いることでNGOのネットワークにかかわる現実の新たな側面を実証的に明らかにすることに成功している点である。

第三に、この研究を通じて、従来の研究が着目してきた「規範」の普及や伝播に着目する形のアドボカシー・ネットワークの研究とは異なるかたちで、その活動の展開過程で合理的な選択といった行動様式も観察されることを明らかにし、NGOの活動の多様性をとらえる必要性を確認すると同時に、フィールドにおける実働的なNGOネットワークの諸活動を理論化しようと試みた点である。

上記のように、きわめて高く評価することのできる論文ではあるが、問題点がないわけではない。それは第一に、NGOが活動している時代状況について十分な形では触れられていないという問題点である。本研究が対象としているNGOのネットワークの事例が主に冷戦下の事例であることに対し、国際政治学における NGO 研究がこれまで対象にしてきたNGO の多くは冷戦後を対象にしているが、本論文で「冷戦」という時代状況を意識的に、しかも明示的な形で記述しきれているかについてはいささかの疑問が残るのである。第二に、本研究の最大のオリジナリティーがその実証の部分にあることを確認することはできるものの、それが、結論、あるいは今後の研究展望における記述で必ずしも十分にはまとめきれていない点である。これは、本研究の分析枠組みに更なる工夫の余地が残されていることを図らずも示す結果になっている。

しかしながら，以上述べたような短所は，本論文の学術的な価値を損なうものではない。このような問題点は、論文に書かれている内容についての欠陥、あるいは論文内在的な欠陥ではなく、今後のさらなるNGOの研究に対する開かれた課題となる性格のものであるほか、広範な読者を想定した出版企画に際しての、執筆者に対する期待されるものとしての面が強い。本論文が学界に対して特に実証面で貢献する優れた業績であることは間違いなく、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。